

Title	朝鮮古蹟研究會の樂浪古墳調査(概要)
Sub Title	
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.139- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

朝鮮古蹟研究會の樂浪古墳調査 (概要)

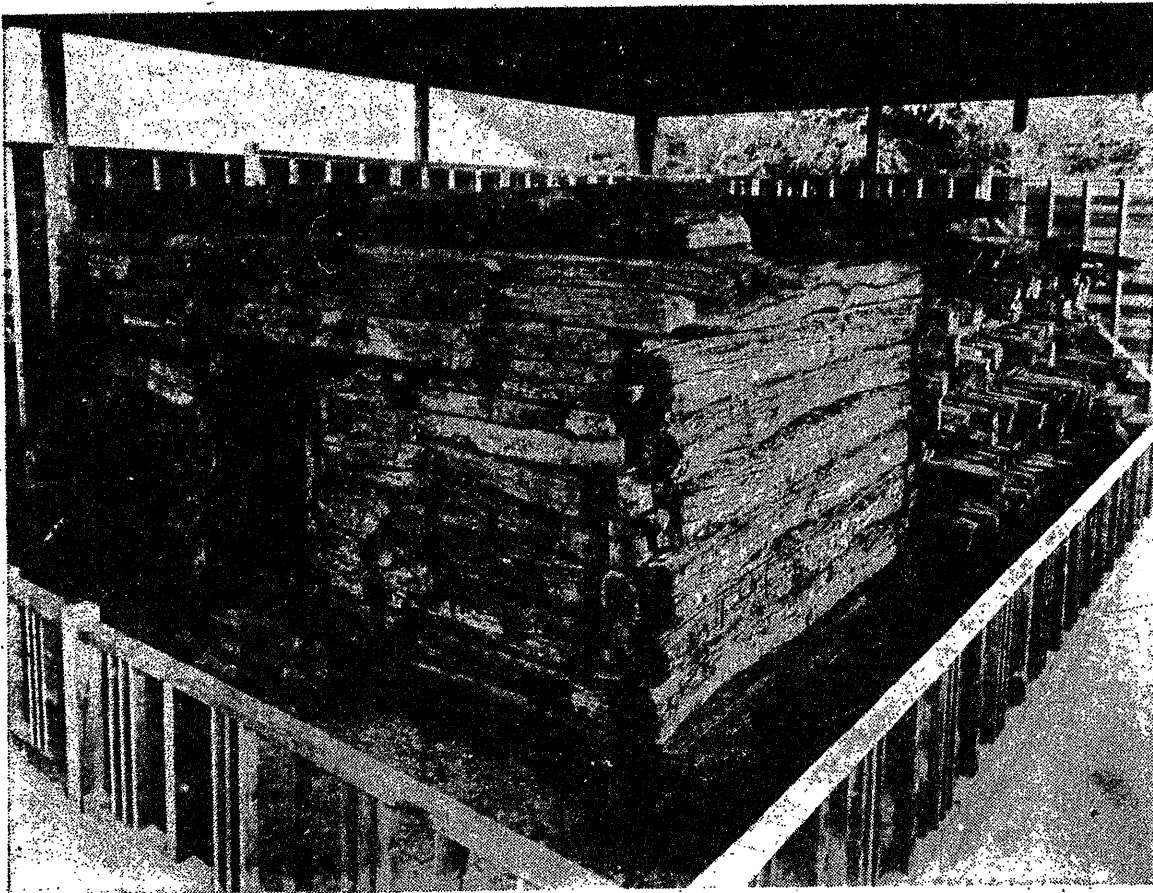
梅 原 末 治

朝鮮平壤府の對岸大同江面に散在する漢の樂浪郡時代の古墳群は、大正五年に行はれた關野博士一行の學術調査に依つて學界の注意を惹き、其後大正十三年秋の平壤府の發掘を経て、同十四年に於ける東京帝國大學主催の王盱の墓の調査に至つて著しく興味を高めたのであつたが、爾後種々の事情で一時中絶の姿を呈した。これが昭和六年の春に黑板博士の盡力で總督府博物館のうちに朝鮮古蹟研究會が組織せられて、其の主な事業の一つとして同古墳發掘調査の再開を見ることになつたのは、東亞考古學に對する一般學界の關心の高まりつゝある際に於いて、まことによることなき現象である。爾來既に三年、調査毎に新事實が現はれ、特に第一回の發掘に於ける彩筐塚の如きは空前の業績を収めたものとするが、なほそれ等に關しては『青丘學叢』

に時々藤田亮策君の概記の見ゆる外、未だ一般に纏まつた経過を徴すべき記事が發表されてゐない。私はその事に關係のある一人として、嚮に或る必要から當初以來の経過の概要を作つたので、こゝに本誌の餘白を借りる事にした。尤も其の詳細はやがて表はれるであらう所の報告書を参照すべきである。

二

さて第一回の發掘作業は昭和六年の秋總督府博物館囑託小泉顯夫、澤俊一兩氏の擔當で行はれたのであつて、當初の豫定では調査古墳は上記大正十四年の東京帝國大學の發掘の際、既に木室の天井部に達しながら時日の都合で中止した石巖里第二〇一號古墳の調査完成と、貞柏里に於ける二個の盜掘墳の整理に存した。處が右の石巖里の古墳は作業の進行につれ室内に三個の木棺を瘞めた造構は明になつ



挿圖一 平壤府博物館に移建の南井里第一一六號墳の外の容

たが既に盗掘に遇ふて遺物の擾亂の太だしいことが分り、つゞいて行ふた同二六〇號墳の整理また刻銘ある漆器の斷片、玉製の劍飾具を得たのみで殆んど見る可き結果を得なかつたから、當時新たに注意に上つた一部に試掘穴のある南井里第一一六號墳の調査に主力を費し、幸にそれから前年調査の王肝の墓にも優つた良好な保存状態の木室を検出而も其の構造に特色があり、内容また極めて豊富で、こゝに古蹟研究會の前途を祝福する好成绩を挙げ得たのである。此の古墳に就いては學術振興會の補助を受けて當事者の報告書が既に印刷に着手してゐるから、詳細はそれに譲ることにするが、室は南北に長い矩形をした主室の前に東西に長い前室を造り添へ、更に羨道を附した木室墳には珍しい横口式の系統に屬し、主軸の總長四十尺に近い。此の主室には内槨を設けて三棺を納め、前室には副葬品を置き、羨門外にも若干の遺品を發見、また前室の壁面には人物騎馬像等の壁畫を描いた痕を存してゐた。而して右の造構が完存して巧みな木組を現はす處、或意味で確かに現存東洋最古の木造建築例をなすものである。それが田澤金吾君の努力に依つて今日では平壤府の博物館に移し組立てられ、同館の誇として其の規模の大は觀者の目を驚かしてゐる。

(挿圖)。次に發見の遺物では彩畫の漆篋を先づ擧ぐ可きである。既に濱田博士が『國華』(第四十三編 第三册)に紹介せられた様に植物質の編物の一部に描かれた漆畫の人物は漢代の畫象石に見る所と同じ題材を取扱ひ乍ら、これは頗る進んだ繪畫としての條件を具へて、支那繪畫史に嶄新なる資料を提供し從來の見解を是正せしむるものとする。此の外本來の形の完具した漆の硯箱の出現、彩文の漆の卷筒の存在等は當代人の文化生活の内容を吾々に明示するものとして、また木製の人物、木馬等の明器の發見も、七寸餘の長さの木板に「縑三匹」故吏朝鮮丞鄭□謹遣吏奉「祭」と漢隸で墨書した木牌と共に、當代の葬法に連關した興味ある材料として數ふ可きであり、なほ他にも記すべき類が多い。發見の遺物の數量からすると石巖里の第二〇一號墳は既掘で著しく擾亂されてはゐたが、また多數の遺物を藏して、其の漆器のうちに居攝三年の銘のある漆盤、元始四年の刻銘を存する漆楮(いま東京帝室博物館藏)、刻紋のある漆小匣と同扁壺等を見、また東京大學の發掘の際注意に上つたと同じ式占天地盤の殘缺も存在したのである。

三

朝鮮古蹟研究會の樂浪古墳調査 (梅原)

次に第二回の調査は翌年の同じ秋期に行はれて、東京美術學校講師小場恒吉氏が總督府博物館囑託榎本龜次郎氏の援助の下に、貞柏里第一二二號、同第一二七號の兩古墳の發掘に従事し、二ヶ月を費して其の一を完成、第一二二號墳は木室の天井に達して中止した。別に此の年余は東京帝室博物館の矢島恭介君と共に塙墓の整理發掘に着手して、石巖里第二六六號墳と南井里第一二〇號墳の調査を遂げたし、榎本氏はまた盜掘に遇ふた南井里第一一九號墳の整理を行ふた。是等のうちで榎本氏の整理した南井里の一古墳は樂浪の遺跡では從來類例を聞かなかつた横口式の石室を主體としたもので、内部に若干の副葬品を遺存、また石巖里の塙墓は其の單室の構造が既に下底部を殘存するに過ぎなかつたのにもかゝらず、内から綠釉を施した双魚洗、燭臺等の明器が現はれて漢代釉藥の研究に新資料を提供する所があり、南井里第一二〇號墳は珍らしく内部が本來のままに遺つて、内容は貧弱ではあつたが單室内二個の木棺に、主として明器類を添へてあつて、それらに學術上興味ある結果を齎した。併し第二回の調査に於ける最も重要な發見は小場氏調査の貞柏里第一二七號の示す所とする。

此の古墳は大きな木組の室内の一隅に内櫛を作つて、うちに二棺を納めた樂浪に於ける木室墳の標式的なものではあるが、架構の細部に所々特徴があり、また天井を覆ふに磚を以てしてゐた。而して發掘の際に於ける調査者の封土に對する周密なる觀察から、木室の上部に南方に開いた横穴式の平面形を示す土壁の存在が注意に上つて、それを通じて内部の棺が時を異にして埋藏せられたこと、並に後の埋葬の如何なる方法に據つたかゞ推される様になつた。これは従來の單なる内部のみに重點を置いた古墳の發掘作業に一の新生面を將來したものとして特筆すべきである。次に内容にあつては其の一棺から樂浪太守掾王光の公私の木印二顆を得、また他の完美な漆塗の棺内には三十歳前後と推定せられる婦人の骨骼が完存して、被葬者の王光夫妻であることを確め得たのははじめ、副葬品としては多數の漆器があり、うちに利王、王大利、益光、王氏率 等被葬者王光の姓名と連關する銘を見受け、従つて他の番氏率なる銘から夫人を番氏とするの推測が加へられる點が面白く、また木部に嵌裝した原形のまゝの弩機や漢代の筆頭の出現等新しい知見であり、特に筆は前年發見の硯と併せ觀て興味が多い。

四

昭和八年度からは瀧、濱田兩博士等の盡力によつて學術派與會から多額の補助を受けることになつたので、發掘は計畫を新にし且つ従來に比して大規模に行はれた。即ち其の全體の責任者としては研究員たる京城帝國大學の藤田亮策教授が之に膺り、小場研究員が現場の事務を統轄、余また新たに研究員として參加、別に助手として東方文化學院東京研究所の松本榮一氏、總督府博物館の澤、榎本兩氏、帝室博物館の矢島恭介、濱本助千代兩氏、研究會囑託の田窪眞吾氏等作業に參與して、九月九日から着手、前後二ヶ月を費し、貞柏里の各地に於いて八基の古墳の發掘調査を行ひ、大正五年以來の記録を作つた。發掘作業は二班に分れて一は余と澤氏とで貞柏里の第二一九號、第二二一號第二二七號なる一群の磚墓の調査に従ひ、他は小場氏統裁の下に矢島氏以下の諸氏に依つて前年中止した第一二三號墳の繼續調査と、第八號、第一三號、第一七號、第五九號の四個の木室墳の新たな發掘を遂行したのである。

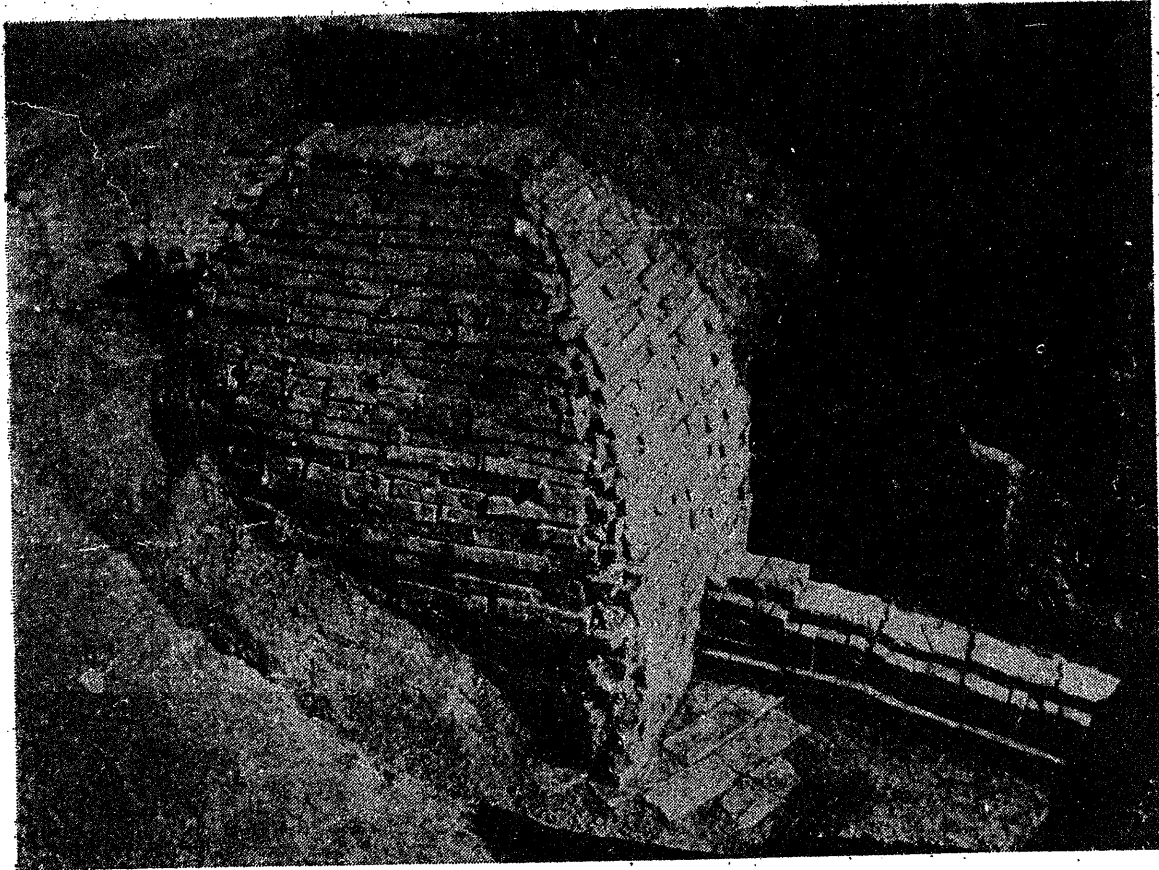
是等多數の古墳中第八號墳は所在地の關係からでもあらうが、木部が甚だしく腐朽して、室は殆んど構造の詳細を

究め難いまでになつてあつたが、内に四個の木棺を瘞めてもその漆塗りであつた事が察せられ、西端の一棺には後漢代と認む可き龍氏作竟宜侯王家當大富云々の銘ある大形の獸帶鏡を置き、又東端の棺からは漢代通有の飾玉に混じて琥珀製の勾玉一顆が現はれて一の新事實を示した。木室

他の四古墳は孰れも一室二棺の最も多い造構に屬する類であつて、其の第一七號墳は既掘ではあつたが、よく室の舊態をとゞめ、外側を包むに美しい白色の玉石を以てした點で、大正五年の發掘に最も豊富な内容物を存した石巖里の第九號墳と構造を一にして居り、これがほとゞ完存する所前者の腐朽からする不明な部分を補ひ、また方形に近い、右の内部構造の南方に、底が段階をした土固めの羨道部の存在を確め得たのは樂浪古墳研究の上に新事實を加へたものとして、殘存した漆器のうちに前漢永光元年の銘ある漆栝を含んだこと、共に盜掘墳の整理では寧ろ好果を收めたものと云ふべきである。貞柏里第一三號墳は這般調査の木室墳中副葬品の最も多かつたもので、二個のうち腐朽した棺内には小形な素壁を存し、夥しい漆器のうちに、はじめに見る大形偏壺と、初に記した南井里の第一一六號墳出土の彩畫漆篋に酷似の筆致を以て描いた狩獵紋畫盤の存在は、

共に保存状態はよくないが注意を惹く遺品であり、また銅製燭臺、形式に新し味のある尙方盤龍獸帶鏡も其の類に加ふ可きものとする。たゞ第五九號墳、第一二二號墳に至つては内部は本來のまゝで共に鏡、漆器、土器、裝身具等を發見したが、規模が割合に小さくて、特に目星しい新事實としてはなかつた。

木室墳に較べて埴室墳の方は調査した三者がそれゞに平面形を異にして、第二二一號墳の單室に對し、第二一九號墳は前後の二室を有し、また第二二七號墳は更にそれに側室を加へた三室の複雑なものであつた。すべて既掘の爲に天井部崩壞して全體の築成状態を究め難かつたが、第二二七號墳の側室は幸に完存して、其の外側に長い埴築の水拔溝のあることを確め(挿圖)また通じて短かい埴築の羨門の外に土を固めて壁をなした長い羨道部があつて、封土の外に達して居り、而して其の羨門は正面の架構に一部木材を使用し、なほ加飾した所などもあり、もとそれが外部に開いてゐたと察せしめたのは、封土の切斷面調査からする墳丘の原形の想定などと共に、前年に端を發した古墳の外延的調査の齎した本年度の新事實とする。右と連關して第二一九號墳では、羨門外で漆案上に耳杯と盆とを載せた



挿圖二 貞柏里第二二七號墳側室外觀

副葬品が発見せられ、また土固めの羨道の底部に三層の別のあることをも確めた。

是等の古墳は木室墳の場合と違つて孰れも一度盗掘の災を受けてゐた爲に副葬品に就いては當初から多くの期待を持たなかつた。而も結果に於いては第二二二號墳が幸にも極く一小部分の破壊を除いてよく舊態を存し、其の室内には朱漆と黒漆塗りの二棺を瘞めた形迹をとゞめ、後者の棺を繞つて、鏡鑑、金銅釦の漆器類、銅刀、古錢(大泉五十)、土器等が副葬當初のままの位置を保つて存し、其の性質の木室墳と全く同式であることを示した。而して漆器類は木心で表裏に華麗な圖紋を描き、また銅刀は環頭式に屬して、鞘は竹で作リ、上に彩畫のある珍らしいものであつた。別に此の墳に於いて羨門外の土壁の一部を穿つて小形の甕棺を陪葬した事實の檢出は、所謂我が甕棺問題に一の新資料を提供するものとする。第二一九號墳また後室は全く擾亂せられてゐたが、隨所に明器類を遺存し、大半舊態を存した前室の副葬品と相俟つて見るべきものがあつた。中で單に兩耳のみならず底部に金銅底を嵌裝した彩畫のある漆椀は、金銀色繪文の銅板飾を加へた漆匣の蓋と共に、此の回發見の漆器の白眉をなすものとして、また其の示す明器の

數量は、ほとんど同じ状態が第二二七號墳内に遺棄してあつた類にも認められる所から、當代に於ける塋墓に副葬した明器の考察に一の基準を與へる點で共に擧ぐ可きである。な

ほ右の第二一九號墳の前堂にはもと朱で壁畫を描いた痕迹を存し、別に羨門兩側の塋の上に墨で虎、龍等を描いたことが認められたのも亦新しい知見としよう。